

「実戦」について考えるようになったのは、空手で実績を重ねていた20代の頃。高校生のときに空手を始めて、ある団体の世界大会に出るまでになったのですが、そこで「これってナイフを持つてこれたら役に立たないよな」と疑問に思うようになったんです。空手は本当に実戦的なのか？と悩むようになりました。

体が大きい者と小さい者が同じ期間練習したら、どんな武道、格闘技であろうと、大きい者が勝つに決まっています。同じ技術を身につけたとすれば、そうなる。ただし、素人に近い大きい者と、長年武道をやった小さな者であれば、少なくとも同レベルにならなければおかしい。でも実際は、空手では短いナイフを持った程度の素人にも勝てません。このことがすごく疑問だったんです。

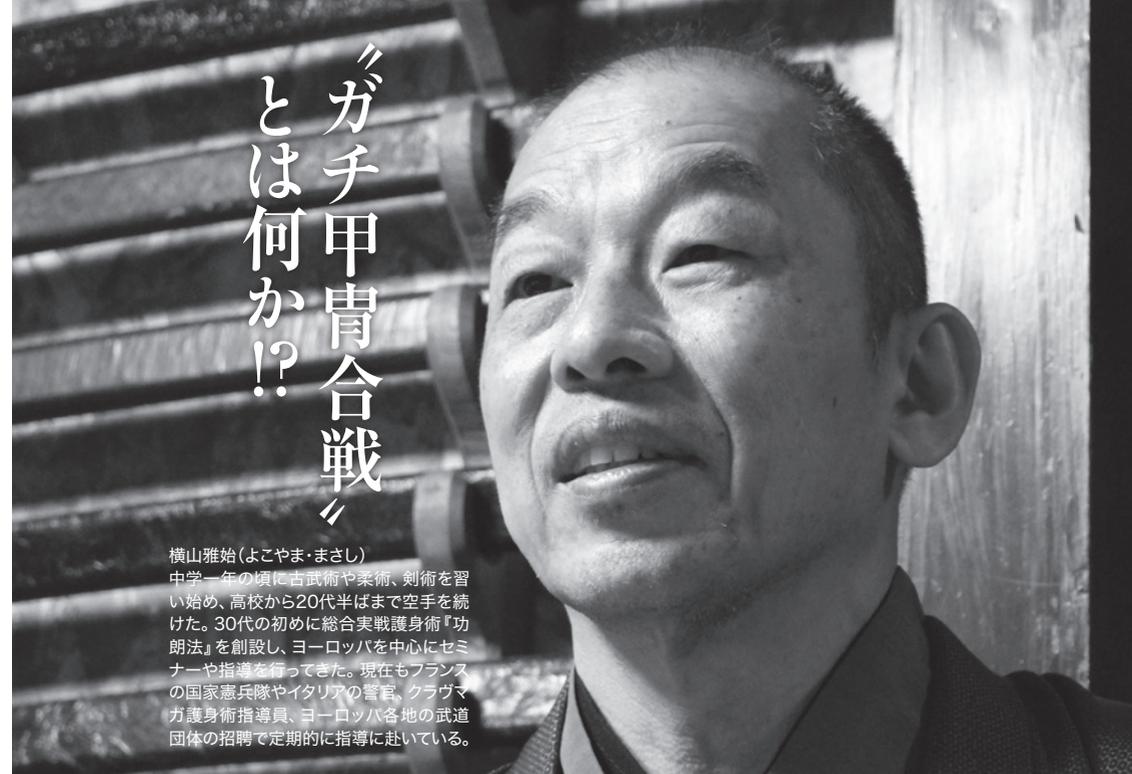
古流武術には武器に対応する技があるのに、なぜそれが使えないのか？と悩むようになり、20

空手では短いナイフを持った程度の素人にも勝てません



©日本甲冑合戦之會

関ヶ原の古戦場等を舞台に100人規模の集団戦を展開する『ガチ甲冑合戦』。甲冑を着たサムライたちが槍や刀を振るってぶつかり合う迫力は圧巻。大阪夏の陣の「真田軍 vs 伊達軍」を再現するなど演出面も工夫され、人気のイベントになっている



「ガチ甲冑合戦」とは何か!?

横山雅始(よこやま・まさし)

中学一年の頃に古武術や柔術、剣術を習い始め、高校から20代半ばまで空手を続けた。30代の初めに総合実戦護身術『功朗法』を創設し、ヨーロッパを中心にセミナーや指導を行ってきた。現在もフランスの国家憲兵隊やイタリアの警官、クラヴマガ護身術指導員、ヨーロッパ各地の武道団体の招聘で定期的に指導に赴いている。

総合実戦護身術功朗法 総師範/日本甲冑合戦之會 代表

横山雅始

日本武術が戦国時代に興ったものだとすれば
いま我々がやっていることが使えるかどうか
試してみたらいいじゃないか

取材/谷川貞治 構成/柴田和則

十代の頃から空手を始めた横山雅始氏は、ほどなく“実戦”という大きな壁にぶち当たった。競技としての空手で実績を重ねながらも、日々募っていく武道の本質への疑問。そこから自身で総合実戦護身術『功朗法』を創設し、海外での市街地戦という生死のかかった環境に身を投じる。さらには『ガチ甲冑合戦』という武道・武術の壮大な実験を始めた。横山氏にとって実戦とは何を意味するのか？